第2講座 重要古語(2)——古文特有の語・解釈のポイントとなる語

確認問題

1 次の——線の語を現代語訳せよ。

(1) いみじう小さきに乗りて漕ぎありくつとめてなど、
（　　）

(2) 秋のけはひのたつままに土御門殿のありさま、いはむかたなく、
（　　）

(3) このごろの御けしき見奉る上人・女房などは、
（　　）

(4) たゆまるるもの、日遠きいそぎ。
（　　）

(5) 雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。
（　　）

(6) いかめしく珍しきみやびを尽くし給ふ。
（　　）

(7) 富士の山を見れば、五月（さつき）のつごもりに、雪いと白う降れり。
（　　）

(8) たよりあらばいかが都へ告げやらむ。
（　　）

(9) せうそくをだにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひけり。
（　　）

2 次の文を——線の語に注意して現代語訳せよ。

(1) 今はなき人とひたぶるに思ひなりなむ。
（　　）

(2) 武蔵野は今日はな焼きそ。
（　　）

(3) 恋すてふ我が名はまだき立ちにけり
（　　）

(4) かねて事みなおほせたりければ、
（　　）

(5) 物のかくれよりしばし見るたるに、
（　　）

(6) いかでかくはおぼしめしおほせらるるぞ。
（　　）

(7) 法皇もよにあはれげにおぼしめして、
（　　）

(8) 七珍万宝さながら灰塵となりにき。
（　　）

(9) ただ粟をのみ食ひて、さらに米のたぐひを食はざりければ、
（　　）

(10) 薬もくはず、やがて起きもあがらで、病み臥せり。
（　　）

3　次の文を――線に注意して現代語訳せよ。

(1) さりぬべき物やはあると、いづくまでも求め給へ。
（　　）

(2) 音に聞くと見るときと何事も変はるものなり。
（　　）

(3) いであな幼や。いふかひなうものし給ふかな。
（　　）

(4) あるまじき恥もこそと心づかひして、
（　　）

(5) 春の夜の朧月夜にしくものぞなき
（　　）

(6) いかがはせむとて、格子二間ばかり開けて、
（　　）

(7) 「蔵人（御格子）、まゐれ」などいひしろふほどに、
（　　）

(8) 坊にもようせずば、この御子のゐ給ふべきなめり。
（　　）

(9) 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、
（　　）

(10) そのほどのめでたさ、いへばさらなり。
（　　）

(11) 春の野にてぞねをば泣く。
（　　）

(12) 世の中にさらぬ別れのなくもがな。
（　　）

4　次の――線部の現代語訳として適するものを選び、それぞれ符号を○で囲め。

(1) 沖の白洲にすだく浜千鳥のほかは跡とふものもなかりけり。
ア 訪れる　**イ** 迷う　**ウ** もどる　**エ** そこに残る

(2) 七つ八つばかりの子の、えもいはずをかしげなるを、
ア 見たこともない　**イ** なみなみでない
ウ 何ともいえない　**エ** とんでもない

(3) あなかま、人に聞かすな。
ア ああ、困った　**イ** まあ、大変だ
ウ しっ、静かに　**エ** あれ、恥ずかしい

(4) 中の品のけしうはあらぬ、えりいでつべきころほひなり。
ア 悪くはない　**イ** めったにない
ウ あまりよくない　**エ** 惜しくない

(5) 京なる医師のがり、ゐて行きける。
ア 医師をしている人を　**イ** 医師の所へ
ウ 医師となって　**エ** 医師のために

(6) 京中の上下、（祇女を）もてなすことなのめならず。
ア 堪えられない　**イ** 好ましいことではない
ウ なみひととおりでない　**エ** おもしろくない

(7) 心にうつりゆく由なしごとを、そこはかとなく書きつくれば、
ア いいかげんに　**イ** することもなく
ウ 束縛されずに　**エ** とりとめもなく

(8) 念じあへずうち泣くけはひあはれなり。
ア 祈り終わらないで　**イ** 人目をはばからないで
ウ がまんしきれないで　**エ** 声は出さないで

読解演習

1　次のA、B二文を読んで、あとの各問いに答えよ。B文はA文をもとにつくられたものである。

A　去年の春、呉竹□んとて、乞ひしを、このごろ「たてまつらん」といへば、[a]「いさや、[b]ありもとぐまじう思ひにたる世の中に、こころなげなるわざをやしをかん」と[c]いへば、「いとこころせばき御ことなり。行基菩薩は、ゆくすゑの人のためにこそ、みなるにはきは□たまひけれ。」などいひて、[d]ほらせたれば、「あはれにありしところとて、見む人も見よかし」と思ふに、涙こぼれて□さす。

（蜻蛉日記）

B　去年の春、呉竹を植えたいと思って人に頼んでおいたら、それから一年もたったこの二月のはじめになってやっと「さしあげますから」と言ってきた。「いいえ、もう少しも長らえたいとは思えなくなりましたこの世に、何でそんな心ないようなことをしておけましょう。」とわたしがことわらせると「まあ、たいへん狭いお心ですこと。あの行基菩薩は行末の人のためにこそ、実のある庭木はお植えなされたと申すではありませんか。」などと言い添えて、その木を送ってよこしたので、ついわたしもそれに気もちを誘われるがままに「そう、ここは①この上もなくふしあわせな女の住んでいた所だと、見る人は見るがいい。」と思って、②胸をいっぱいにさせながら、それを植えさせた。（堀辰雄「かげろふの日記」）

問1　A文中の□に共通の二字を、B文を参考にして入れよ（かなづかいに注意する）。（　　）

問2　A文中の――線a～dの部分はB文ではそれぞれどのような表現になっているか。B文から書き抜け。

a（　　）　b（　　）

c（　　）　d（　　）

問3　B文中の――線①・②はA文のどういう表現にもとづいているか。A文から書き抜け。

①（　　）

②（　　）

2　次の文の――線①～⑥の口語訳として最も適当なものを次から選び、符号を○で囲め。

鶯は、①文などにもめでたきものに作り、声よりはじめてさまかたちもさばかりあてにうつくしきほどよりは、②九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。人の「さなむある」といひしを「③さしもあらじ」と思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことに④さらに音せざりき。

①　ア　物語　　イ　漢詩文　　ウ　学問　　エ　手紙

②　ア　上品だ　　イ　珍しい　　ウ　派手だ　　エ　美しい

③　ア　美しい　　イ　趣がある　　ウ　かわいらしい　　エ　りっぱだ

④　ア　寺院　　イ　都　　ウ　里　　エ　宮中

⑤　ア　そうでもあるまい　　イ　きっとそうだろう　　ウ　決してそんなことはない　　エ　多分そのようだ

⑥　ア　どうしても耳にしなかった　　イ　わずかに鳴くだけだ　　ウ　全然鳴きもしなかった　　エ　もっと鳴かなかった

3　次の古文を読んで、あとの各問いに答えよ。

亭子の院に御息所たちあまた御曹司[a]してすみ給ふに、年ごろ[1]ありて、河原の院のいとおもしろくつくられたりけるに、京極の御息所[A]ひとところの御曹司[b]をのみして[2]わたらせ給ひにけり。春のことなりけり。とまり給へる御曹司[c]ども、いと思ひのほかに[3]さうざうしきことをおもほしけり。殿上人[B]などかよひ参りて、「藤の花のいとおもしろきを、これがさかりをだに御覧ぜで」などいひて見ありくに、文をなむ結びつけたりける。[4]あけてみれば

世の中のあさき瀬にのみなりゆけば昨日のふぢの花とこそ見れ

とありければ、人々かぎりなく[5]めでまどはれがりけれど、たが御曹司[d]のしたまへるともえ知らざりけり。男どものいひける

藤の花色のあさくも見ゆるかなうつろひにけるなごりなるべし

（大和物語）

〈注〉　亭子の院――宇多天皇譲位後の御所。　河原の院――もと左大臣源融（とおる）の邸宅で、善美をきわめた当代随一の名園であった。融の死後、宇多上皇の所有となる。　京極の御息所――宇多天皇最愛の皇妃。

問1　文中の――線A、Bの読み方を現代仮名づかいで書け。

A（　　）　B（　　）

問2　「曹司」という語には、①宮中あるいは貴族の邸内に設けられた部屋・局、②そこに住む人、の二通りの意味がある。文中の――線a～dの「御曹司」の意味を、それぞれ符号で答えよ。

a（　　）　b（　　）　c（　　）　d（　　）

問3　文中の――線1・3・5の意味を書け。

1（　　）　3（　　）

5（　　）

問4　――線2・4の主語はだれか、それぞれ次の符号で答えよ。

ア　宇多上皇　　イ　京極御息所　　ウ　他の御息所

エ　殿上人

2（　　）　4（　　）

問5　～～線「春のことなりけり」という一文は、一見単純なようであるが、実は全体の雰囲気を盛りあげるのに、非常に大きな役割を果たしている。その役割とはどんなものか。次から選び符号を○で囲め。

ア　心にうけた傷手が時間的にもまだなまなましく、季節の推移によせてひとしおかみしめられることを示す。

イ　いかにも爛漫の春らしい豊かな気分を強調して、全体の背景を暗示する。

ウ　華やかな栄えもたちまちに衰えていく人間の運命を象徴する。

エ　自然の人間の心に与える慰め、あるいは人間の小さな喜びや悲しみを超越する自然の深遠さをあらわす。

問6　会話文の「これがさかりをだに御覧ぜで」（その盛りをさえごらんにならないで）の後は省略されている。その文を次の二通りに補った場合、主語はだれになるか、それぞれ答えよ。

1　「わたらせ給ひにけり」――（　　）

2　「こもり給へること」――（　　）

問7　文中の「藤の花……」の和歌の、「うつろひにける」は「花の色がおとろえた」という意味であるが、あと一つの意味もこめられている。それはどのようなことか、説明せよ。

（　　）

第5講座 文法(3)—助詞の要点

確認問題

1 次の——線の「の」はどんな働きをもつか、あとのものから選びそれぞれ符号で答えよ。

(1) まろ、この歌の返しせむ。
(2) ある人の子の童なる、ひそかに言ふ。
(3) をりふしの移り変わるこそ、物ごとにあはれなれ。
(4) 吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

ア 主格を表す　**イ** 同格の意を表す
ウ 連体修飾語を作る　**エ** 連用修飾語を作り、比喩を表す

(1)（　）(2)（　）(3)（　）(4)（　）

2 次の——線の「に」の用法はどれか、あとのものから選びそれぞれ符号で答えよ。

(1) 二日、なほ大湊に泊れり。（　）
(2) 東のかたに住むべき国求めにとて行きけり。（　）
(3) 奈良志津より室津に来ぬ。（　）
(4) 十月つごもりなるに、紅葉散らで盛りなり。（　）
(5) 涙こぼるるに、目も見えず、物も言はれず。（　）
(6) 春の野に若葉摘まむと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ（　）

ア 動作の目的を示す格助詞　**イ** 時間・場所を示す格助詞
ウ 動作・作用の帰着点を示す格助詞
エ 動作・作用の原因・理由を示す格助詞
オ 順接の接続助詞　**カ** 逆接の接続助詞

3 次の古文を——線の助詞に注意して現代語訳せよ。

(1) さし籠めてありとも、かの国の人来ばみな開きなんとす。
（　　）
(2) 月は有明にて光をさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、
（　　）
(3) 身はいやしながら、母なむ宮なりける。
（　　）
(4) 君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る
（　　）
(5) 長き爪して眼（まなこ）をつかみつぶさん。
（　　）

4　次の——線の係助詞に応じて、下に示した古語を適する活用形に改めて（　）に書け。

(1) いづれの山か、天に（　　）。〈ちかし〉
(2) なりは塩尻のやうになむあり（　　）。〈けり〉
(3) かかることする人やはある（　　）。〈べし〉
(4) ただ波の白きのみぞ（　　）。〈みゆ〉
(5) もののあはれは秋こそ（　　）。〈まさる〉

5　次の——線の助詞の意味・用法はあとのどれか、それぞれ符号で（　）に答えよ。

(1) けふ波な立ちそ。
(2) 内侍のすけなどにてしばしあらせばや、とこそおぼゆれ。
(3) 白山（しらやま）の観音、これ消えさせ給ふなと祈るも、物狂ほし。
(4) いつしか出でさせ給はなむと待ち聞こえさするに、いと久し。
(5) あはれに悲しきことなりな。
(6) あはれに思し召しけむかし。
(7) 夜鳴くもの、何も何もめでたし。乳子どものみぞさしもなき。
(8) 大蔵卿ばかり耳とき人はなし。
(9) 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

ア　詠嘆を示す　**イ**　限定を示す　**ウ**　禁止を示す
エ　自己の希望を示す　**オ**　程度・範囲を示す
カ　他に対する願望を示す　**キ**　念を押す意を示す

(1)（　　）(2)（　　）(3)（　　）
(4)（　　）(5)（　　）(6)（　　）
(7)（　　）(8)（　　）(9)（　　）

6　次の各文の——線部を、＝＝線の助詞に注意して現代語訳せよ。

(1) まことにて名に聞くところ羽（はね）ならば飛ぶがごとくに都へもがな
（　　）
(2) 世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ。
（　　）
(3) 光やあると見るに、蛍ばかりの光だになし。
（　　）
(4) 散りぬとも香をだに残せ梅の花恋しき時の思ひ出にせむ
（　　）
(5) 寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝おりて拾はむ
（　　）
(6) いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、
（　　）
(7) されど、門のかぎりを高う作る人もありけるは。
（　　）
(8) この岡に菜摘ます児　家聞かな　名告（の）らさね
（　　）

読解演習

1　次の古文を読んで、あとの各問いに答えよ。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ、住みはつる習ひならば、いかにものののあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人（A）久しきはなし。[1]かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞ（B）。つくづくと一年を暮らすほど（C）も、こよなうのどけしや。飽かず惜しと思はば、I千年を過ぐす（a）、一夜の夢の心地こそせ（D）。

住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何かはせむ。命長ければII恥多し。長く（b）、四十に足らぬほどにて死なむこそ、[2]めやすかるべけれ。

[3]そのほど過ぎぬれば、[4]かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはむ事を思ひ、夕べの陽に子孫を愛して、[5]さかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心（E）深く、もののあはれも知らずなり行くなむ（F）。

（徒然草）

〈注〉　あだし野・鳥部山――平安京の西と東の郊外にあった墓地。
夕べの陽に子孫を愛して――白居易の詩中に「朝露に名利を貪り、夕陽に子孫を憂ふ」とあるのを引用している。

問1　文中の（　）Aには程度を示す副助詞、Bには念を押す意を示す終助詞、Cには最小限の限定を示す副助詞、Eには限定を示す副助詞が入る。それぞれ次から選び符号で答えよ。

A（　　）　B（　　）　C（　　）　E（　　）

ア　だに　　**イ**　かし　　**ウ**　ばかり　　**エ**　さへ　　**オ**　のみ

問2　文中（　）Dに助動詞「む」、Fに形容詞「あさまし」が入る。その適する活用形を答えよ。

D（　　）　F（　　）

問3　文中（　）a・bに共通する接続助詞は次のどれか、符号を○で囲め。

ア　て　　**イ**　ども　　**ウ**　に　　**エ**　とも　　**オ**　して

問4　～線I・IIそれぞれと同じ用法の「ば」を、それぞれ文中から一か所、文節で抜き出せ。

I（　　）

II（　　）

問5　――線1・2を現代語訳せよ。

1　（　　）

2　（　　）

問6　――線3は何をさしているか。

（　　）

問7　――線4「かたち」を文中の別のことば五字で言いかえて示せ。

（　　）

問8　――線5を「さかゆく」の主語を入れて現代語訳せよ。

（　　）

問9　この文章で作者は二つのことを言おうとしている。それはどういうことか。自分のことばで簡潔にまとめよ。

（　　）

（　　）

問10　線①の「に」は次のどれか、次の符号を○で囲め。

ア　格助詞　**イ**　接続助詞　**ウ**　完了の助動詞

エ　副詞の一部　**オ**　形容動詞の活用語尾

問11　線②の「と」と同じ「と」は次のどれか、（　）に○を入れよ。また、その他の「と」は何か、区別がわかるようにそれぞれ（　）に記せ。

(1)　汐風真砂を吹き上げ、雨朦朧（もうろう）として鳥海の山隠る。

(2)　ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

(3)　かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや。

(4)　文殊（もんじゅ）はそもそも何人ぞ、三世（さんぜ）の仏の母といます。

〈注〉　文殊——文殊菩薩。　三世——過去・現在・未来。

(1)（　　）

(2)（　　）

(3)（　　）

(4)（　　）

問12　線③の「せ」と同じ「せ」は次のどれか、（　）に○を入れよ。また、その他の「せ」は何か、区別がわかるようにそれぞれ（　）に記せ。

(1)　思ひ知る人に見せばや山里の秋の夜ふかき有明の月

(2)　わが待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人は訪れもせず

(3)　うへおはしますに、御覧じていみじうおどろかせたまふ。

(4)　思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらまし

を

(1)（　　）

(2)（　　）

(3)（　　）

(4)（　　）

問13　線④「なむ」と同じ「なむ」は次のどれか、符号を○で囲め。また、すべての文を線部に注意して現代語訳せよ。

ア　おしなべて峯もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを

（　　）

イ　揖取（かぢと）り、……酒を食らひつれば、早く往なむとて、

（　　）

ウ　一人して取りにまかりなむといふ。

（　　）

エ　かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒（い）ゆとなむ。

（　　）

解答《select Ⅲ高校古文Ⅲ》

第1講座　重要古語(1)

確認問題

1 (1) 生きにくい　(2) ひまな様子　(3) はっとしてそれと気づく　(4) 心寂しい　(5) 長年の間　(6) もの思いに沈んでぼんやりと見つめる　(7) 心ひかれる　(8) りっぱだ　(9) そのまま

【現代語訳】 (1) 世の中は生きにくくわずらわしいものだなあ。〈源氏物語〉　(2) 舟も出さないでひまなので、ある人が詠んだ(歌)、〈土佐日記〉　(3) 秋が来てしまっていると目にははっきりと見えないけれども、風の音に(もう秋なのだと)自然とはっと気がついてしまうことだ。〈古今集〉　(4) この酒をひとりで飲むのが心寂しいので、お呼び申したのだ。〈徒然草〉　(5) 長年の間信頼して、毎朝めしあがっていた大根でございます。〈徒然草〉　(6) 日が長く暮れにくい夏の日に、一日中もの思いに沈んでいると、何というわけもなくもの悲しいことだ。〈伊勢集〉　(7) どのような人とはわからないけれども、何よりも心ひかれて立ち寄ってみるうちに、〈奥の細道〉　(8) たいそうりっぱなご様子に対して、どんなことをお答え申しあげることができようか(とてもお答えなどできないのだ)。〈源氏物語〉　(9) (宇多天皇は)皇太子にお立ちになって、そのまま同じ日に(天皇の)位におつきになる。〈大鏡〉

2 (1) 1 はかないさま　2 まじめだ　(2) 1 気がかりだ　2 心配がない　(3) 1 似合わしい　2 ふさわしくない　(4) 1 整っている　2 未熟だ　(5) 1 ぐあいが悪い　2 見苦しくない

【現代語訳】 (1) 1 自分と自分の住まいとが、不安定ではかない様子は、またこのようである。〈方丈記〉　2 仏への供養をいつもまじめになさって、日を過ごしていらっしゃる。〈源氏物語〉　(2) 1 あの女郎花は気がかりに思えるなあ、こんな荒れている家(の庭)にひとり咲いているのだから。〈古今集〉　2 気だてなどの古風な点はあるけれども、まったく心配がないお世話役だろう。〈源氏物語〉　(3) 1 とても寒い朝に、火などを急いでおこして、(おこした)炭などを(部屋部屋へ)持って行くのも、(冬の朝らしくて)たいそう似合わしい。〈枕草子〉　2 年月がたつにつれて、中途半端な宮仕えは似つかわしくなく、将来のわが身を案じて、〈源氏物語〉　(4) 1 女君のご容貌は、整っていてかわいらしげであって、〈源氏物語〉　2 まだまったく未熟なころから、名人の中にまじわって、〈徒然草〉　(5) 1 ぐあいが悪いもの、他の人を呼んだときに、自分かと思って顔を出したの。〈枕草子〉　2 髪はゆったりとしてとても長く、見苦しくない人のようだ。〈源氏物語〉

3 (1) 上品なもの、梅の花に雪が降りかかっているの。〈枕草子〉　(2) (月夜よりも)かえって優雅で趣のある夜だなあ。〈更級日記〉　(3) この世に語り伝えられていることは、真実のことはつまらないのであろうか、多くのことは皆うそである。〈徒然草〉　(4) 火鼠の(皮衣への)思いが、瞬時に消えてしまったのも、まことにあっけない。〈源氏物語〉　(5) 春の夜の闇というものはわけがわからないものである。梅の花は(闇に隠されて)その色は見えなくとも、かおりのほうは隠れるだろうか(隠すことはできないではないか)。〈古今集〉　(6) (断りにくい餞別の品は)いくらなんでも捨てるわけにもいかず、道中のやっかいものとなっているのは何ともしかたがない。(奥の細道)　(7) 四条大納言がお撰びになったものを、(小野)道風が書くようなことは、時代が違いましょう。不審で(ございます)。〈徒然草〉　(8) 丹後へ(使いに)やった人は帰って来ましたか。どんなにか待ち遠しくお思いのことでしょう。(十訓抄)　(9) 天皇のお嘆きはなみひととおりではない。〈平家物語〉　(10) 言葉遣いのぶしつけなもの、舟を漕ぐ人たち。〈枕草子〉

4 (1) ア　(2) イ　(3) ア　(4) ウ　(5) イ　(6) イ

【現代語訳】 **4** (1) このように驚きあきれたうそであったので、〈竹取物語〉　(2) かわいらしいもの、瓜にかいた幼子の顔。〈枕草子〉　(3) 寝込んでいびきなどを見苦しくかくものもいる。〈源氏物語〉　(4) (水車は)とうとう廻らないでむだに立っていた。〈徒然草〉　(5) たいそう不思議なことだなあ。……天人がおくだりになったのだろうか。〈宇津保物語〉